

正論 すっかりしぼんだ対中関心 産経新聞-1989.09.23

正論

東京外大教授 中嶋 嶺雄

すっかりしぼんだ対中関心

〓〓〓 〓〓〓
仏、西独が活気取り戻す
私は今夏、ゼミナールの学生を引率して「東西ヨーロッパを比較する」海外研修旅行に行ってきた。ケンブリッジ、パリ、ウィーン、東ベルリンなどで現地の大学教授や専門家の出席を得てセミナーを開催するという旅行だった。

当然、ヨーロッパ再統合の問題や

を得たけれど、今回は、西欧、とくにフランスや西ドイツが大いに活気をとりもどし、イタリアもしっかり

イッも、イデオロギイ的には硬直したままであるが、西側とは比較にならないにせよ、経済的にはかなり堅調で、ポーランドやハンガリーに見られる「自由化」「西側化」への政治の解放と経済の破たんとの矛盾を

を大いに評価していた。だが、その中国が中ソ和解に走り、揚げ句に「血の日曜日」の大惨劇を招来したために、中国にたいする熱いまなざしはすっかり冷めてしまったといっ

では鄧小平以後の変化への期待をいだいている。そのような将来の中国を見込んで、数多くの亡命者を積極的に受け入れて、去る七月十四日の革命二百周年のパレードにも中国の民主化運動の活動家たちを第一線に並ばせて、人権と民主の国であることを示していた

学生がパリで中国共産党フランス支部を創立した時代にも似ているといえよう。当時の活動家の一人が鄧小平であったことを思うとき、まさに歴史の皮肉を感じざるを得ないが、私自身、今回、パリでフランスの中国研究者たちと連携して民主化運動を海外で続けている中国からの政治亡命者たちの活動を垣間見ることができた。

天安門事件以後の西欧の目

考えれば、それなりにやっているという印象を得た。

この九月十一日に発生したハンガリー経由の東独市民の西独への大量出国についても、東独側はすでに読み込み済みで、経済が悪いからではなく、自由を求めているのだと東独のある学者は私に語っていた。

〓〓〓 〓〓〓
パリに集まる中国亡命者
そうしたなかで、ゴルバチョフの「ヨーロッパの家」政策が各国で注目され、共感と警戒が交錯しているもの、従来はそのような運に關連して引き合いに出された「中国の影」がすっかりしぼんでしまったこととは否めない。

中国は地理的にはヨーロッパから離れているとはいえず、たとえばフランスなどは米ソの意のままには動かない外交姿勢などの点でかつて中国



今回の研修旅行では、各地で中国が、いまやパリには数多くの亡命者専門家の参加も得たが、いずれの国が中国から集まってきていて、将来の専門家も当面の中国にたいしてきに期している。その光景は、かつてわめて厳しい見方をしており、一方一九二〇年代初頭に多くの中国人留

ポーランド、ハンガリーなどの東欧情勢、ゴルバチョフ「新思考外交」の柱である「ヨーロッパの家」(The European Common House) 政策などに話題が集中し、同時に、最近の中国情勢が大きなテーマになった。

二年半前に同じような機会をもったときは、アジアNIEOSの目覚ましい台頭に比して、ヨーロッパがめ

してきて、ヨーロッパ再興を感じさせる。東欧では今回訪れたチェコも東

新著を刊行したばかりだったので、それを一冊献呈すると、氏は笑み深くページをくらべていて、そのなかに「中華連邦共和国」という文字を見つけ、大いに同感して、中国の民主化運動が目指すのはまさにこの点だとし、「専制の終結、人権の擁護、共和国の再建、連邦制の結成(結束専制、維新人権、重民共和、締造聯邦)」という十六文字のローガンを書いてくれた。

〓〓〓 〓〓〓
連邦共和国めざす民主化
たまたま私は日本をたつ直前に「中国の悲劇」(講談社)と題する

しかし、当面、彼らの運動がきわめて厳しい状況の中に置かれるだろうことも疑えない。

ヨーロッパから遠ざかりゆく中国が、彼らの運動によって再び古いものとなるのかどうか、大いに注目し値しよう。(なかじま・みなお)